

留学生の人間関係と対人志向性の関連についての一考察

－ 異文化適応のプロセスに注目して－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
山田 雄登

本研究では、留学生の人間関係形成の経過を捉え、対人志向性がどのような役割を担っているのかについて検討することを目的とした。対象者はアジア圏出身かつ、2年以上日本に滞在している留学生5名（男性2名、女性3名）であった。「留学してからどのように人間関係を形成していったか」について自由に語ってもらい、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach: M-GTA）で分析を行った。分析の結果、留学生の人間関係形成のプロセスについての概念図が生成され、以下の4点が示唆された。第1に、強すぎる対人志向性は人間関係の形成を阻害すること、第2に、留学初期において対人志向性は比較的高く、徐々に減少していくこと、第3に、留学生の人間関係に対する姿勢には「相手に合わせる」「合わない人を避ける」の2つのタイプが見られ、前者は人間関係に負担を感じやすく、後者は比較的自然に人間関係を形成していくこと、最後に、人間関係から得られる様々な支援や支え、そして負担が存在することが明らかになった。以上から、留学生に対する支援の際には本人の対人志向性について考慮する必要がある、特に留学初期には過剰な対人志向性を持たないよう、対人関係以外の留学における目的を再確認させる働きかけが有効であると示唆された。